

日本語史研究の現状と展望

李承英*

〈Abstract〉

Current trends and prospects of studies on the history of Japanese language

This study explores current trends and prospects on the history of Japanese language by analyzing articles published from January 2019 to December 2020 in the related areas. The results are as follows.

Firstly, it was found that the number of researches on the script, orthography, and vocabulary tended to gradually decrease, whereas the number of researches on phonology gradually increased. In particular, in the case of phonological research, researches on the pronunciation of Chinese characters had been continuously popular, and the research data had focused mainly on medieval and modern times.

Secondly, in the area of vocabulary research, researches using modern corpus had actively been carried out, and the kanji research using 'databaselization' was also under way. The study of vocabulary focused on the transition period from the early-modern era to the modern era.

Thirdly, the study of grammar focused on the medieval era, which was a period of the language change, and many studies were conducted using "Syoumono" as materials.

Fourthly, studies on materials such as Korean language study books and "Syoukaisingo" published in Japan during the enlightenment period were also continuously being conducted.

It is hoped that in the future, researchers will not only deepen the quality of their individual researches, but also undertake quality collaborative researches in cooperation with other researchers.

Field: Japanese History

Key words: Grammar, Pronunciation of Chinese characters, Vocabulary, Phoneme

1. はじめに

本稿は2019年1月から2020年12月にかけての日本語史研究の動向について研究方法と方向性の側面から考察することを目的とする。

今回の調査と考察においては、韓国で発行された学術誌に掲載された日本語史関係の論文91本を対象とし、研究分野別、時代別に展望する。

上記期間中の大まかな研究動向としては通時的研究より共時的研究のほうが目立つ。また研究分野としては活発化しつつある音韻を視野に入れた研究が盛んであった。実際、日本語史は音韻史・文字史・文法史などの境界が曖昧なところもあり、言語学や文学、外国語学にも乗り入れられるのが現状であ

* 光云大学 日本語史 教授

り、分野を精密に分けることは無理が生じかねない。そこで本稿では朴孝庚(2019)の方法論を援用し、文字表記、音韻、語彙、文法、その他の5つの分野に分けて時代別に展望する。

2. 調査範囲と研究分野

まず、日本語史関連研究の最新動向については、朴孝庚(2019)と李康民(2020)の検討が必要であろう。李康民(2020)では2012年から2018にかけての学術誌を検討し、日本語研究の全般的な動向について関連学科の減少や研究者の高齢化などによる衰退現象を指摘する。また日本語史の研究に限っては開化期の韓国語学習書を利用した明治期の近代日本語研究が比較的に活発に行われたことを報告している¹⁾。朴孝庚(2019)では、2017年1月から2018年12月までの論文について書誌学的方法論に基づき、従来の日本研究の方法論を採用した研究が多数行われていると報告している。また、この時期の研究対象は、韓国語との交流に加え、中国やベトナムなど漢字文化圏の言語交流や影響など、取り扱う対象が広がっていることも指摘している。

今回の調査では日本語関連の学術誌を検索した結果、日本語史の論文91本が抽出された。以下、学術誌名のリストと日本語史関連論文の数を〈表1〉に示す。

〈表1〉日本語関連学術誌別の日本語史論文数

順番	学会名	学術誌名	掲載回数
1	韓国 日本語学会	日本語学研究	10
2	韓国日本語教育学会	日本語教育	8
3	韓国日語日文学会	日語日文学研究	8
4	漢陽大学 日本学国際比較研究所	比較日本学	8
5	韓国日本学会	日本学報	8
6	韓国日語教育学会	日本語教育研究	6
7	日本語文学会	日本語文学	6
8	韓国 日本文化学会	日本文化學報	5
9	大韓日語日文学会	日語日文学	5
10	韓国 日本近大学会	日本近大学研究	5
11	韓国外国語大学 日本研究所	日本研究	4
12	中央大学 日本研究所	日本研究	3
13	韓国 日本言語文化学会	日本言語文化	3
14	東アジア日本学会	日本文化研究	2
15	韓国 日本語文学会	日本語文學	2
16	檀國大学 日本研究所	日本學研究	2
17	高麗大学グローバル日本研究院	日本研究	1

1) 李康民(2020)によると開化期日本で作られた韓国語学習書には、当時の韓国語と日本語が併記されているため、韓日両国の近代語研究に活用できる言語資料として注目されており、同時に、捷解新語のような倭学資料、訓読資料や漢字音に関する研究も過去に続き、持続的に進行していると述べている。

18	東国大学 日本学研究所	日本学報	1
19	東北アジア文化学会	東北アジア文化研究	1
20	韓国アジア学会	アジア研究	1
21	啓明大学 人文科学研究所	東西人文学	1
22	口訣学会	口訣研究	1
計	-		91

今回の日本語史研究の分析に用いる論文は91本である。前回の朴孝庚(2019)の調査結果では115本であったのに比べると大きく減少している。91本の論文の内訳を研究分野別に分け、前回調査と比較示すと以下の通りである。

〈表2〉 分野別論文数

発行年	音韻	文法	文字表記	語彙	その他	計
2017-2018	15	23	17	28	25	115
2019-2020	25	21	10	17	18	91

2017年～2018年の日本語史論文の分野別数は朴孝庚(2019)からの引用である。日本語史の論文は前回調査より当該年度の論文の数が減少している。とくに前回調査でもっとも割合の高かった「語彙分野」の論文の数が非常に減少している。一方、もっとも低い割合を示していた音韻史に関する論考は、前回調査より増加していることは注目に値する。以下では、これらの特徴を踏まえ、大きく次の5つの分野(1)文字表記 (2) 音韻 (3) 語彙 (4) 文法、(5)その他に分けて述べる。

3. 分野別

3.1 文字・表記

文字・表記の研究には漢字、仮名、表記体の研究があり、主に古文書・古記録・古辞書の例を中心に各語の表記の変遷を論じる研究が多い。ここでは、漢字、仮名、表記体の順に述べる。

(1)漢字

まず上代の研究として安熙貞(2019)は、『日本書紀』を資料として「与」と「及」の用字法全般について分析している。また、金連花(2019)は『日本書紀』の発話引用に数多く見られる「謂」の使用状況を概観し、発話の引用形式および発話主体と発話対象の上下関係の面から考察している。

中世の抄物を資料を用いて漢字訓読で成果を上げている研究としては呉美寧(2020)がある。呉美寧(2020)では中世の標準的な資料である京都大学清家文庫『古文孝經抄』の訓点に注目し、その成立と抄本文の構成と接続詞について考察している。また呉美寧(2018)を基に、古文孝經原文に注記されている訓点の種類と内容を分析し、当該字の訓点から成立されている漢文訓読の系統について論じている。

時代は下がって徐順玟(2020)では植民地時代の新聞「朝鮮時報(1914～1930年)」に見られる外国の地名表記「当て字・取音字」を中心に漢字表記の国名を総合的に整理し、同時代に日本との政治・経済・外交関係の国々を把握すると同時に年代別漢字表記の使用変遷等を分析している。

(2) 仮名

まず、中世のキリシタン資料を用いた仮名の用字法研究には鄭炫赫(2019)が挙げられる。鄭炫赫(2019)ではキリシタン版『ぎやどぺかどる』と筆写本『ぎやどぺかどる下巻』との仮名の用字法の比較を行い、両書ともに異字体が80%以上使われていると述べている。

近世・近代の資料を用いた古典仮名遣い系統の研究としては姜盛文(2020)(2019)が注目される。『古言梯』以降の仮名遣書の間の影響関係を漢語に注目して分析している。文化以前のもの(『和字便覧』『正誤仮名遣])と以降のもの(『狂歌かなづかひ』『今古仮字遣』『尚古仮字用格』『文章仮字用格』『掌中仮字便覧』『増補正誤仮名遣])の漢語の仮名遣いの違いを明らかにしている。また文化以降の仮名遣書に見られる変化として漢語の項目が増加したことと、字音の項目が別に設けられていることも指摘している。

一方、日本語史と情報通信技術と融合研究として、李承英・ソヨンホ(2020)の共同融合研究が注目すべきであろう。ここでは古代・中世時代の日本文字くずし字のデータセットであるKuzushiji-MNISTとKuzushiji-49を正確に分類するためのディープラーニング学習方法について模索している。この研究ではディープラーニング基盤の技術と日本語史分野との融合を図っており、東アジアと西洋の歴史、文学、文化などの研究者に基礎データの提供可能性について探っている。

上記の動向から従来は文字・表記の研究では上代仮名遣いについての研究が主であったが、今回の調査では上代の資料を用いた論究は一本もないことが特記すべき点であろう。

(3) 表記体

国内で唯一の字体の研究として、申雄哲(2019)は文化的転換期であった12世紀日本における字体の運用実態および変遷様相の一面を考察している。申雄哲(2019)は当時期の漢字辞典である圖書寮本『類聚名義抄』の見出し語に掲載された字体を対象に考察している。また異体字表記の研究として、金秀珍(2020)では『朝鮮時報』の記事のタイトルと副タイトルに見える異体字を整理し、異体字表記の特徴と変化様相について分析している。このような国内における漢字字体史研究は日本におけるそれより活発であるとはいいがたい。

3.2 音韻

日本語史の研究の中でもっとも論文の数が多かったのは音韻史である。音韻史に関する論考は25本で、多様な視点からの研究が多く見られる。音韻史には文字史・表記史など隣接分野が多数存在するが、今回の調査では研究の便宜上細分化したことを断っておく。

3.2.1 漢字音

音韻史の論文のうち、文字史・表記史の分野とつながっている論文から紹介する。まず金永和(2019)では上代の資料を対象とし、書紀・歌謡九七の「武須弥陀例」における「弥」が[ビ] 仮名として用いられるとし、音韻論の観点から試みている。つづいて金永和(2020)では魏志倭人伝における音韻体系について考察する中、「弥馬獲支」の「支」の読みを分析している。ここでは倭人伝で「支」は官名・国名として[き]の音価を表わしているが、[け]の音価として読まれているところもあるとし、表記の観点からも分析している。

次に音韻分野で多数を占めているのは漢字音についての研究である。中国の漢字音との関連から、

以前は中国の漢字音の輸入時期についての研究が主であったが、今回の調査では漢字音の系統、清濁、声点など多方面にわたる研究が活発に行われていることがわかった。

(1) 呉音・漢音・唐音

中世の日本製韻書を用いた唐音の研究として李承英による一連の研究が挙げられる。李承英(2019a,b)では、中世の代表的な韻書である文明版『聚分韻略』(1486)・慶長版『聚分韻略』(1612)・『略韻』(1279)の漢字音、とくに呉音・漢音・唐音の対立が顕著である舌内撥音字を中心に唐音を比較し、三書の相關関係についても考察を加えている。続いて、李京哲・呉采炫(2019a,b)(2020)では唐宋音研究のシリーズ研究として、假攝、遇攝、效攝の諸韻の分韻表を作成し、唐宋音の反映様相を考察している。さらに、李承英(2020a,b)では、『聚分韻略』の諸本と漢和辞書『倭玉篇』との音注の一致度を比較することで、漢籍を読むための韻書音と当時の識者層に広く使われた通俗音と韻書音とを比較している。呉音の研究として、日本呉音の時間的・空間的起源を探る論究として金正彬(2019)が注目される。金正彬(2019)では六朝初・中期譯經、特に東晋(317-420)の譯經を對象にしてデータベースを作成、分析し、院政期・鎌倉期の中世日本呉音は、子音と母音の混在現象が、六朝初・中期の譯經漢字音と非常に類似していることを指摘している。また、宋在漢(2020)では舌音系の全濁字を中心として日本近世の呉音と字音變容について考察している。

従来、国内では唐音の研究は数少であったが、特定の研究者らによって唐音の研究が活発であったことは注目されよう。

(2) 清濁

清濁の研究として宋在漢(2020a,b)の一連の研究が目立つ。宋在漢(2020a,b)では近世日本の法華經の字音學を中心に唇音全濁字の清濁の變容について、韻書の引用の観点から考察している。讀誦音として呉音が定着してきた過程を究明するため、『法華經音義』諸本と注釋書3種と比較し、類推や濁聲点など漏落に認めがたいことが散見されたと述べている。

(3) 声点

声点の研究として朴美賢(2019)では『釈日本紀』『秘訓』の韓国系固有名詞に加点されている声点のうち、線点の資料価値について考察し、中古音の上声と去声は釈日本紀では平声に加点される傾向が強いことを述べている。続いて朴美賢(2020)によると、『釋日本紀』は韓国系固有名詞の声点資料としてその価値が認められるとしている。

(4) 漢字音の比較研究

前回の調査でも指摘されているように、今回の調査でも日中の漢字音の比較研究が特定の研究者らによって行われている。李京哲・楊宇(2020)では中國語の唇音を中心に中國語音と日本漢字音の對應について試みている。その他、研究対象を漢字文化圏に広めた論文もある。まず李相怡・李京哲(2019)では、ベトナムの漢字音の中で舌音系について韓国と日本の漢字音と比較している。李相怡(2020)ではベトナムの漢字音との比較を通して韓日漢字音の字音體系を聲類を考察している。その他、ベトナムの漢字音、チベット漢字音、韓国の中世傳承漢字音と万葉仮名を比較した研究として、キム・デソン(2019)が見られる。キム・デソン(2019)では、中国上古音から中唐時期までの哈韻の音韻史的变化、そして三国

史記の地名表記から吏読資料までの韓国資料に現れた「乃」の検討を通じて古代日本語の「乃」表記字研究として/na/音を中心に考察している。このように、日本漢字音史とは、音韻史に属するものでありながら、文字史や語彙史とも深く関わっているのではないかと考えられる。

3.2.2 音声研究資料

中世の訓点本を文字・表記の研究だけではなく、当時の音価を推定できる日本語音声資料としての活用可能性を模索した論文が注目される。まず呉美寧(2019)は、京都大学清家文庫『論語集解』を資料として、論語集解の訓点本に注記されている発音注記について検討し、墨点は漢字だけに、朱点は仮名に区分され注記されていると報告し、『論語集解』の音声資料としての可能性を示唆している。続いて、呉美寧(2019)では古文孝経原文に注記されている訓点の発音と宣賢の論語集解に記入されている発音注記と比較し、宣賢論語集解は訓読文を読み上げる際に、当時の発音で正確に発音できるように発音注記を記入していることを指摘している。

ほかにも、中世末期および近世日本語の音価に焦点を当てたものとして権景愛(2019)が挙げられる。朝鮮資料を中心に、当時の朝鮮人にとって日本語のガ行音に伴われる鼻音性がどのように聞こえていたか、また、当時の朝鮮語の末尾子音(終声)の軟口鼻音「o[ŋ]」は日本人にはどのように聞こえていたかを中心に音声学的観点から考察している。

3.3 語彙

語彙の研究は、各時代の資料に基づいた論究、大量のコーパスを利用した論究、近代語から現代語に移行する時期の翻訳語の論究が多く見られた。

3.3.1 各時代の資料に基づいた研究

今期の調査では鎌倉時代から室町時代にかけての軍記物語の混種語の変貌を考察した研究が目立つ。朴善玉(2019a)では、中世日本語史の重要なテキスト『平家物語』と『太平記』を比較して軍記物語の混種語について考察している。つづいて朴善玉(2019b)では混種語にあらわれた中世時代の造語の諸様相、つまり混種語の語構成要素と『太平記』の混種語の結合パターンの構成要素についても考察を加えている。朴善玉の一連の論究は語彙研究の代表的な方法論を用い、詳細な考察として認められる。近代における中国語の俗語の使用を巡っては、中国語および中国文学からの影響を考察した羅工洙(2019,2020)があげられる。まず羅工洙(2019)では尾崎紅葉の全作品に用いられている言語表現(漢字表記)を調査して、中国俗語趣味の受容の特徴と意味用法について述べている。明治期に西洋の翻訳語が広く知られているが、活発な漢語の翻訳ができた背景として、近世から近代にかけて中国語の口語の影響があったことに着目している。つづいて羅工洙(2020)では日本の近世・近代における中国語の「喫驚・吃驚」の受容と展開について坪内逍遙の作品を中心に中国俗語の実態を把握している。

最後に、近代の語彙研究においてもっとも基本的な研究である辞書関係の研究について触れたい。まず権景愛(2019)では近代韓国語と二重語辞典である『鮮和兩引』と『朝鮮外來語辭典』の資料的価値について論じ、部録に収録されている日本外來語『動詞化した語』を調べた。ここでは現代動詞化の言葉と比較し、現代動詞化の条件との違いについて新しい観点から考察がなされている。

朴均轍(2019)では、『佛和對譯兵語字類』・『佛和陸海軍術語字彙』と『改正兵語辭書・佛和對譯の部第一』の関連性を中心とし、佛日軍隊用語辞典を考察している。朴均轍(2020)では、『哲学字彙』におけ

る初・再版の学科名訳語を対象に、両版における原語・訳語の異同およびその意味、対訳辞書との影響関係、学科別の生存率などについて考察している。

イヒョンジョン(2019)では、日本の20世紀初頭の新語を対象にして現代日本語と現代韓国語の辞典における登載可否を分析し、20世紀初めごろの日本語が韓国語にかなり受容されたことを指摘している。

近代日本語と韓国語との語彙交流現況に関する研究としてコンミヒ(2019)がある。コンミヒ(2019)では開港後見聞録「日東記游」を資料とし、近代日本製新漢字語について『日本国語大辞典』及び『明治のことば辞典』を基に、近代以降、用例だけが収録された日本製新漢字語に対する可否を分析している。さらに、李慈鎬(2019)では、近代日本の代表的な和英辞書『和英語林集成』(Hepburn, 平凡)に載っている三字漢字表記語(1104)を対象に、それに活用された漢字接尾辞の種類、使用頻度、その活用における特徴などについて分析している。同一の二字漢字と結合する漢字接尾辞の交替現象など幅広い調査を行い、近代から現代に至る漢字接尾辞の交替現象およびその特徴を明らかにしようとする研究の出発点であると言える。

3.3.2 コーパスを利用した研究

今期の語彙史の分野ではデータベース及びコーパスを利用した論究が目立つ。コーパスを利用した代表的な研究として権景愛(2020)、申雄哲(2020)などが挙げられる。まず、権景愛(2020)では開化期から現代語の表記法を中心に韓日における「新語」と「外来語」、その他の用語の使い分けの様相について考察を行った。資料としては「新語」関係の辞書類、ならびに先行研究で取り扱われた諸用例を参考にしつつ、韓国での雑誌および新聞記事に見られる用語の検索は「韓国史データベース」を利用している。申雄哲(2020)では、国立国語院の『韓国語-日本語学習辞書』の漢字語の見出し語とその日本語対訳語を対象に各言語における語彙的位相を比較している。日本語対訳語の語彙的な位相については日本語学習辞書支援グループ(2015)「日本語教育語彙表 Ver. 1.0」および国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」の語彙表との対照によって検討している。日本語の歴史コーパスを用いて現代語彙の変化を通時的に研究した田中牧郎(2020)では、日本語の構成比の推移を調べ、江戸時代までは日本語の割合が減少し、漢字の割合が増加する傾向があったことを報告している。このコーパスは、日本語史を把握するために重要な資料を選定し、さまざまな形態素情報を提供しているのが特徴である。このようにコーパスを使用することで、これまで期待できなかった精密な研究が可能と考えられる。

李慈鎬(2020)では『附音挿圖英和字彙』の漢字表示に関する研究として、データベース化のためにJISX0208の漢字文字セットを用いて構築した『英和字彙』(初版、1873)のデータベースを対象に、2000年に制定されたJISX0213文字セットにより入力可能になった漢字はどのように分類できるのかを分析した。一方、最近日本の国立国語研究所では、日本語の歴史コーパスの開発が活発に行われている。

このような漢字のデータベースの整備によって日本語史研究のあり方も多様化の途を辿っていると言える。

3.3.3 翻訳漢字語の研究

ソシヨヒョン(2019)では『無情』に現れる近代の日本の漢字語を調査すると同時に日本の近代翻訳漢字語の成立時期とその日本漢字音の性格を考察している。崔瓊玉(2019a,b)では、1870年代日本[科学]が[science]の翻訳語として、[經濟]が[economy]の翻訳語として定着して韓国で受容され用いられるようになった過程を、様々な資料を通して考察している。尹榮珉(2019)では、1917年に朝鮮総督府から刊行

された『朝鮮語法及會話書』を中心にその形式と内容、資料的意義、韓国語と日本語の言語的影響関係について考察している。最後に朴孝庚(2019)は、「浪漫」という近代語の成立と変遷について述べている。

3.4 文法

文法史の研究は、主には時代別の資料を用いての用例調査に基づき、実証的に分析している論考が多い。まず文法史の研究に使われた資料は、中世から近世にかけての朝鮮資料を含めた外国資料と抄物、狂言、物語などの日本資料が主流である。特定の資料にあらわれた文法現象をとり扱っている論文を中心に、以下で時代別に触れていく。

3.4.1 中古時代中後から中世初期資料

ハジュヨン(2019)では、中古時代中後期の資料である宇津保物語(974年)、源氏物語(1008年ごろ)、中世初期資料である平家物語(1240年)で「とか」の用例を調査し、文中に現れる「とか」と文末に現れる「とか」を分類した。また会話文、地の文、和歌、消息文に分類し、「とか」の意味用法についても分析している。韓世眞(2019)では天草版『平家物語』(天草本)の「地の文」の敬語を原據本である覚一本『平家物語』(覚一本)と対照し、語り手の敬語意識を考察している。天草本の「地の文」では語り手によって中世後期に発達した丁寧語がよく反映されていることを指摘している。

3.4.2 中世後期の資料

(1) 抄物資料

中世後期の抄物資料の研究として、林禔映(2019a)では叙法副詞「いかにも」「かえって」「とても」「ともこうも」「なかなか」を分析している。林禔映(2019b)では、日本語文法史研究を活用した古典文法教育作りの実践例を分析して、現代の日本語教育に関連付けて述べている。つづいて林禔映(2020)では「たかだか」「たかが」の成立と展開について考察している。吳美寧・李泰燮(2020)では『古文孝經抄』を資料とし、抄物に用いられた接続詞を調査し、抄物は相対的に文語的な性格が強いものと指摘している。

(2) 狂言資料

狂言を資料としたイ・スヒャン(2020)では、中世後期の口語資料である『大藏虎明本狂言』と『天理本狂言六義』に現れる推量助動詞「べし」を中心に活用形と意味用法の観点から考察している。

抄物と狂言とともに中世後期の代表的資料であるキリシタン資料を用いた論究は数少ない。

3.4.3 近世資料

近世に入って関丞希(2019, 2020)では近世前期の作品である近松浄瑠璃の指定表現「なり」を中心として「なり」と「ぞ」、「なり」と「ぢや」、また「そなた」の使用様相を比較考察している。また『春色梅兒譽美』を中心として「おまはん」と「オマへ」を比較し、その相違点を明らかにしている。

朝鮮資料である『捷解新語』(17世紀)を資料とした敬語の研究として趙燭熙(2020a)では『捷解新語』に用いられている「さしらる」の改修について考察している。

崔彰完(2019)では、朝鮮資料である1881年本『交隣須知』に表れる「ソウニゴザル」「ニゴザル」に

について調べ、京都大学所蔵本にはどのような形態で表われていたかについて考察している。またそれらが韓国語にもすべて敬語的要素が含まれていることも指摘している。また趙垺熙(2020b)では『捷解新語』における「こそ」係り結び構文が衰退していく過程や、「卓立の強調」のニュアンスがどのくらい見られるのかについて、韓国語の対訳を用いて考察している。

また李鍾姫(2019)では、韓・日対照言語学の観点から『捷解新語』における「時間領域副詞」の変化を考察している。近世の文法研究は、主に韓国語の資料もしくは韓国語とのかかわりから探った論文が多い。

3.4.4 近代以降の文法研究

朴孝庚(2020)では明治時代文学作品「吾輩は猫である」にあらわれた自称(一人称)、対称(二人称)、他称(三人称)の人称詞を考察している。

一方、通時的研究としては安志英の一連の複合辞研究が唯一である。安志英(2019)では近代日本語法の一つである経験・回想・習慣を表す複合辞「- ことがある」とその変形形態の分析考察を通じて、各時期における使用実態と歴史的変遷を考察している。最後に安志英(2020)では、「-カネル」「-カネナイ」は『万葉集』から初めて抽出され、現代にいたるまでの変遷過程について通時的に考察している。

以上、文法の研究では、文法項目の中で敬語、副詞、助動詞の研究が主流をなしており、中世の資料と近世の資料とした共時的研究が多く行われていることがわかった。言語の変化は一変に起因するわけではないので、このように作品別、時期別に使用頻度を計測することは言語の変化の流れを理解するための有意義な研究であると考えられる。

3.5 その他

上記の分野に入らないが、近世に入って、日本語史関連の資料について書誌学的な考察を行っている論文、日本語と韓国語の翻訳関係、韓語学習書、両国の教育制度についての論文などが多数発表されている。李康民(2020)でも指摘されているように、特に開化期日本で作られた韓国語学習書、捷解新語のような倭学資料研究も過去に続き、持続的に進行されている。以下、資料の発行順に簡単に触れておきたい。

まず、李康民(2019)では日本で出版された韓語学習書の制作背景と近代日本語と韓国語の研究の立場からこの資料の価値について、明治時代の日本語の特徴を反映している点から、さまざまな問題にアクセスできる言語データとして活用できることを指摘している。

また、関丙燦(2019)では韓語学習書である『全一道人』を資料とし、〈欲遣繼妻〉についての翻訳語を中心に考察している。漢文の『勸懲故事』を韓国語と日本語に翻訳し、芳洲の翻訳の様相と態度や言語的特徴などについて多方面から探り、『全一道人』の翻訳資料としての活用可能性を確認している。この論究は翻訳語関連の研究の範囲と方法を示唆した点から意義が認められる。

成玟珂(2019a,b)では、近代日本人の漢語学習書の学習コンテンツを言語テキストの側面、日本と朝鮮という空間的側面、政治手段の側面から見ることで近代漢語学習の実体を究明している。開化期当時、日本人が刊行した韓語学習書を対象に、韓国語と日本語の言語的影響関係について調べた研究もある。尹榮珉(2109)では、日本参謀本部で編纂された『朝鮮語法及會話書』開化期当時、日本人が刊行した韓国語学習書を対象に、韓国語と日本語の言語的影響関係について調べている。

続いて、日本の教育制度について、とくに16世紀のイエズス宣教師の日本語教育について論じた論究

として権景愛(2020)がある。16世紀に来日したイエズス宣教師によって設立されたコレジオにおける日本語教育の様相と教育観を調べ、さらに日本語訳官の養成機関であった朝鮮の司訳院で行われた日本語教育方法と比較し、共通点と相違点を分析している。コレジオでの日本語教育の目標は布教活動および理想的な司祭の養成に必要な日本語会話の習得であったのに対し、朝鮮時代の司訳院では隣の国である日本との親睦を深めるために必要な訳官の養成にその目標が置かれていたと報告している。

一方、戦後の日本、韓国、台湾の国語教科書と国家イデオロギーの転換に関する研究として宋淑正(2020)による一連の研究がある。戦後米軍政期を迎えた韓国と日本の状況の中で行われた教育政策のうち、国語教育と国語教科書に含まれたイデオロギーを国民党政府の時代を迎えた台湾の国語教育と比較している。米軍政期日本の国語教育はそれまで日本が主張してきた軍国主義と国家主義を強要する思想から抜け出して学習する児童・生徒ひとりひとりの人格と社会性成長に重点が置かれていることを報告している。宋淑正(2019)では、植民地国語常用政策に関して調べ、国内外を問わず日本が行った国語常用政策には無理に強いられた政策であったことを主張している。ほかにも宋淑正(2020)では、植民地時代の簡易学校の制度を考察している。

以上、近世には日本にある朝鮮の資料、日本語と韓国語の学習書が主に研究対象になっていることや、両国の言語や教育にかかわる資料を中心に研究されていることがわかる。

4. おわりに

本稿では、2019年から2020年にかけて、韓国で発表された日本語史関連の研究論文91編を対象に文字表記、音韻、語彙、文法、その他の5分野に分けて概括した。全体的な特徴は、次のように整理できる。

第一、文字・表記・語彙分野は徐々に減少する傾向であり、音韻分野の論文は徐々に増加することが分かった。とくに、音韻研究の場合、漢字音研究が以前と同じく、持続的に進められており、研究資料の時期は主に中世から近世に当てられている。

第二、語彙研究では近代のコーパスを利用した研究が活発に行われていることや、データベース化による漢字研究もみられる。語彙の研究は近世から近代へと移行する時期に集中している。

第三、文法研究では言語の変化時期である中世時代の研究に焦点が当てられており、抄物を資料とした研究が多数行われている。

第四、開化期日本で作られた韓国語学習書や『捷解新語』のような倭学資料研究も過去に続き、持続的に行われている。

今後はコーパスの整備により、大量データを利用した量的検証型の研究が増加すると予測される。

また他分野からの日本語史研究への参入も多くなるだろう。このような学際化の進行は基本的には望ましいと思う。ただ、電子テキストや検索技術の発達にもかかわらず、実際に資料を読み取ったり、時間をかけて解釈できる能力が欠けているなら日本語史研究への貢献は期待しがたい。様々な資料を見ていくうえで、それぞれの資料の性格を正確に把握しようとする姿勢は研究者として欠かせない資質であろう。

日本語史研究には、まだ明らかにすべきことが多く残っている。今後、個別の研究の深化はもちろん、研究者の力が有機的に結合した新しい研究が行われる時代になることを望みたい。

【各分野別論文リスト】

< 文字表記 >

- 강성문(2019) 「『尚古仮字用格』と『増補正誤仮名遣』の関係について—共通に見られる漢語に注目して—」『日本學報』121 韓國日本學會 pp.63-82
- _____ (2020) 「『古言梯』 이후고전가나 표기법 계통의 가나 표기법서에 관하여-한자어에 주목하여」『日語日文學研究』114 韓國日語日文學會 pp.111-136
- 신웅철(2019) 「일본12세기한자사전의자체(字體)연구」『아시아연구』22 한국아시아학회 pp.289-313
- 徐順玪(2020) 「일제강점기 신문인 <조선시보> 에서 보이는 외국지명 표기 「当て字: 取音字」에 관한 연구」『日語日文學』88 大韓日語日文學會 pp.187-204
- 吳美寧, 李泰燮(2020) 「『古文孝經抄』(1-66/コ/11貴)에 대하여-抄本文의 구성과 접속사를 중심으로-」『日本語學研究』64 韓國日本語學會 pp.37-51
- 정현혁(2019) 「キリシタン版『ぎやどぺかどる』の仮名の用字法—筆写本『ぎやどぺかどる下巻』との比較—」『日本研究』82 韓國外國語大學校 日本研究所 pp.317-346
- 박병서, 이승영, 서영호(2020) 「CNN기반 딥러닝을 이용한 Kuzushiji-MNIST/49 분류의 정확도 향상을 위한 학습 방안」『한국정보통신논문지』한국정보통신학회 pp.355-363
- 東ヶ崎祐一(2020) 「四夷総説」日本条の「寄語」について」『日本言語文化』52 韓國日本言語文化學會 pp.63-77

< 音韻 >

- 權景愛(2019) 「朝鮮資料に見られる日本地名のガ行音の様相—鼻音性の反映された表記を中心に—」『日本言語文化』49 韓國日本言語文化學會 pp.7-23
- 김대성(2019) 「고대일본어의 ‘乃’ 표기자 연구:/na/음을 중심으로」『日本語教育』90 韓國日本語教育學會 pp.91-108
- 김영화(2019) 「書紀・歌謡九七の「武須弥陀例」における弥の読みについて」『日本語教育』89 韓國日本語教育學會 pp.1-9
- _____ (2020) 「魏志倭人伝における音韻体系に関する小考—表記の観点より見る「弥馬獲支」の「支」の読み」『일본어교육』93 韓國日本語教育學會 pp.65-74
- 金正彬(2019) 「동진(317-420)시대 범어한역경 연구-일본오음의 기원을 찾아서-」『口訣研究』43 口訣学会 pp.289-320
- 박미현(2019) 「『석일본기』 『비훈』에 가점된 한국계 고유명사의 선점(線點) 고찰」『日本語文學』86 日本語文學會 pp.25-46
- _____ (2020) 「寛文九年 整板本『일본서기』 한국계 고유명의 성점 연구」『日本研究』53 中央大學校 日本研究所 pp.49-66
- 宋在漢(2020a) 「唇音全濁字의 淸濁 變容에 대한 고찰—近世 日本의 法華經 字音學을 중심으로—」『日本學研究』61 檀國大學 日本研究所 pp.223-239
- _____ (2020b) 「日本近世法華經字音學에 있어서 唇音全濁字의 淸濁 문제-韻書 인용과 字音 變容을 중심으로—」『日本研究』85 韓國外國語大學校 日本研究所 pp.225-246
- _____ (2020c) 「日本近世吳의 字音變容에 대한 고찰 -舌音系全濁字를 중심으로-」『日本研究』83 韓國外國語大學校 日本研究所 pp.193-214

- 오미영(2019) 「집현점본의 음성자료로서의 가능성 모색-京都大學 清家文庫 소장 『論語集解』 (1-66/口/8貴)를 대상으로」 『日語日文學研究』 94 韓國日語日文學會 pp.93-112
- 吳采賢, 李京哲(2019a) 「唐宋音における假攝韻の字音形について」 『日本文化研究71동아시아日本學會』 pp.233-251
- _____ (2019b) 「唐宋音에 걸친 遇攝韻의 字音形에 대하여」 『比較日本學』 45 한양대학교 日本學國際比較研究所 pp.243-266
- 吳采賢, 李京哲(2020a) 「唐宋音에 걸친 流攝韻의 字音形에 대하여」 『日本學報』 122p 韓國日本學會 pp.51-68
- 吳采賢, 李京哲(2020b) 「唐宋音에 걸친 效攝韻의 字音形에 대하여」 『日本學報』 125 韓國日本學會 pp.111-130
- 李相怡(2019) 「한일월(韓日越) 한자음(漢字音) 비교를 통한 지섭(止攝) 개구(開口) 3등운(等韻)의 음 운사적 고찰」 『日語教育』 49 韓國日語教育學會 pp.107-120
- 李相怡(2020) 「베트남漢字音과의 비교를 통한 韓日漢字音의 字音體系 비교연구*11) - 聲類를 중심으로 -」 『日本語學研究』 63 韓國日本語學會 pp.21-37
- 李京哲 · 楊宇 · 이병훈(2020) 「中國語音과 日本漢字音對應-中國語唇音-」 『日語教育』 53 韓國日語教育學會 pp.356-362
- 李承英(2019a) 「중세 韻書에 나타난 舌內撥音字의 當음 비교 연구」 『日本語教育』 90 韓國日本語教育學會 pp.137-152
- _____ (2019b) 「중세 韻書에 나타난 舌內撥音字의 한자음 연구—吳音과 漢音を 중심으로—」 『日本學報』 120 韓國日本學會 pp.1-26
- _____ (2020a) 「室町時代喉內撥音字의 韻書音과 通俗音과의 比較研究—聚分韻略, 『略韻』과 『倭玉篇』과의 比較를 通して—」 『日本語教育』 92 韓國日本語教育學會 pp.79-93
- _____ (2020b) 「『聚分韻略』 諸本の 韻書音과 『倭玉篇』의 通俗音과의 比較」 『日本語文學』 88 日本語文學會 pp.119-148
- <文法>
- 閔丞希(2019) 「『そなた』とその周辺語についての考察」 『日本文化學報』 82 日本文化學會 pp.123-140
- _____ (2019a) 「『おまはん』に関する一考察-『春色梅兒譽美』を中心として-」 『日語日文學研究』 110 韓國日語日文學會 pp.63-81
- _____ (2020b) 「近世前期『なり』とその周辺語に関する考察」 『日語日文學研究』 114 韓國日語日文學會 pp.159-177
- 朴孝庚(2019) 「『吾輩は猫である』における人稱詞の一考察」 『比較日本學』 49 漢陽大學校 日本學國際比較研究所 pp.343-366
- 안지영(2019) 「복합사의 역사적 변천에 관한 연구」 『日本文化學報』 83 韓國日本文化學會 pp.101-116
- _____ (2020) 「『-カネル』, 『-カネナイ』의 成立과 變遷過程에 관한 一考察」 『日本語文學』 88 日本語文學會 pp.61-76
- 유수연(2020a) 「『高等國語讀本』과 『高等朝鮮語及漢文讀本』에서 現れる 日本語と 韓國語의 對應의 樣相および 特徵」 『日本語文學』 63 日本語文學會 pp. 77-92
- _____ (2020b) 「『高等國語讀本』과 『高等朝鮮語及漢文讀本』에 나타나는 일한 양국어의 대응 양상 및 특성-기사의 내용과 일한 양국어의 조사를 중심으로-」 『日本語教育』 88 韓國日本語育學會 pp.69-83
- 이수향(2020) 『天理本狂言六義』에 나타나는 추량표현 - 조동사 「べし」를 중심으로 - 『日本語學研究』 63 韓

国日本語学会 pp.169-180

- _____(2019) 「狂言자료에 나타나는 추량조동사 「べし」에 관한 고찰 - 大藏虎明本과 天理本の 비교를 통하여 -」 『日語教育』 48 韓国日語教育学会 pp.161-174
- 李鍾姬(2020) 「『捷解新語』における「時間領域副詞」について—한·일대조언어학의 관점에서」 『日本文化學報』 83 日本文化學會 pp.261-283
- 林禎映(2019a) 「日本語文法史研究を活用した古典文法教育作りの実践例」 『日本語教育』 90 韓國日本語教育學會 pp.43-52
- _____(2019b) 「中世後期の抄物資料に見られる叙法副詞の特徴について」 『日本語教育』 89 韓國日本語教育學會 pp.43-52
- _____(2020) 「副詞『たかだか』『たかが』の成立と展開」 日本言語文化51 韓國日本言語文化學會 pp.89-102
- 趙燭熙(2020a) 「『捷解新語』における「こそ」構文の衰退と対訳について」 日語日文學88大韓日語日文學會 pp.281-296
- _____(2020b) 「『捷解新語』に用いられている「さしらる」の改修について」 日語日文學 85 大韓日語日文學會 pp.259-274
- 崔彰完(2019a) 「『交隣須知』に表われるソウニゴザルについて」 『日語日文學研究』 111 韓国日語日文学会 pp.83-100
- _____(2019b) 「한일대역자료에 나타나는 二에 접속하는 ゴザル에 대하여」 『日語日文學研究』 109 韓国日語日文学会 pp.177-197
- 韓世眞(2019) 「天草版『平家物語』의 「地」의 敬語 -카타리테(語り手)의 경어 의식을 중심으로-」 『日語日文學研究』 108 韓国日語日文学会 pp.67-87
- 하주영(2019) 「『とか』에 관한 일고찰 -중고 중후기·중세 초기의 자료를 중심으로-」 日本文化研究 72 동아시아 일본학 pp.175-194

〈漢字語彙論〉

- 공미희(2019) 「근대 日本製新漢字語 유입을 통한 동북아해역의 지식교류 연구」 『日本語文學』 87 日本語文學會 pp.1-20
- 권경애(2019) 「한일 근대 문헌에 나타나는 '신어'와 '외래어'의 개념-범위와 용어의 분화과정에 대하여-」 『日語日文學研究』 114 韓国日語日文学会 pp.137-158
- 羅工洙(2019a) 「日本の近世・近代における中国語の「喫驚・吃驚」の受容と展開」 『比較日本学』 漢陽大學校 日本學國際比較研究所 pp.219-242
- _____(2019b) 「尾崎紅葉の中國俗語趣味」 『동북아 문화연구』 60 동북아시아문화학회 pp. 235-259
- 박근철(2019) 「佛日군대용어사전고찰 - 『佛和對譯兵語字類』 · 『佛和陸海軍術語字彙』와 『改正兵語辭書·佛和對譯の部第一』의 관련성을 중심으로-」 日本語文學 80 韓國日本語文學會 pp.69-82
- 박선욱(2019) 「혼종어에 나타나는 중세시대 조어의 제양상」 比較日本学47 漢陽大學校 日本學國際比較研究所 pp.243-264
- _____(2019) 「軍記物語の混種語の考察-"平家物語"と"太平記"を對照して」 『日本文化研究』 71 東アジア日本学会 pp.73-97
- _____(2019) 「『太平記』の混種語の結合パターンと構成要素について」 『日本學研究』 57 檀國大學日本研究所 pp.155-182
- 白南德(2019) 「『대한흥학보』에 출현하는 일본한자어 연구-「번역기사」를 대상으로」 『日本語文學』 韓國日本

語文学会 80 pp.83-101

소서현(2019) 「이광수의 無情에 나타나는 근대 일본한자어」 『日本近代學研究』 63 韓國日本近代學會 pp.25-38

신웅철(2020) 「한국어와 일본어의 同綴 한자어 비교 연구-국립국어원 『한국어-일본어 학습사전』 의표제어와 대역어를 중심으로」 『日語日文學研究』 115 韓國日語日文學會 pp.153-172

李炳萬(2020) 「일본어학연구近現代における和製漢語の漢字音選定について」 『日本語学研究』 64 韓國日本語学会 pp.175-190

李慈鎬(2019) 「『和英語林集成』의漢字接尾辭」 『日本語文學』 87 日本語文學会 pp.175-190

_____(2020) 「『附音挿圖英和字彙』の漢字表示に関する研究-データベース化のために-」 『日本語文學』 91 日本語文學会 pp.23-37

이현정(2019) 「20세기 초 신어의 정착에 관한 한일 대조연구-사전의 등재여부를 중심으로-」 『日語日文學』 108 韓國日語日文學會 pp.23-43

田中牧郎(2020) 「『日本語歴史コーパス』による近代語彙の変化の研究」 『東西人文學』 58 啓明大学 人文科学研究所 pp.115-143

〈その他〉

成玟珂(2019a) 「개화기 일본어학습서 연구-경성학당 일어잡지사 「독습일어잡지」 -」 日本語教育研究 4 6 韓國日本語教育学会 pp.49-67

_____(2019b) 「근대 일본의 한어학습콘텐츠-한어학습서의 시기구분과 내용적 특징-」 『日本學報』 118 韓國日本学会 pp.315-341

李康民(2019) 「1905年刊『韓語教科書』에 대하여」 『比較日本學』 47 漢陽大學校 日本國際比較研究所 pp.265-280

송숙정(2019a) 「일본이 식민지에서 자행한 국어상용화 정책에 관한 일고찰」 『日本文化學報』 83 韓國日本文化學會 pp.83-99

_____(2019b) 「戦後日本、韓国、台湾の国語教科書と国家イデオロギーの転換に関する研究」 『日本文化學報』 85 韓國日本文化學會 pp.85 221-242

_____(2019c) 「일본 미군정기 국어독본의 내용분석에 관한 연구-먹물칠로 삭제된 제5기 국정독 본을 중심으로-」 『日本 研究』 50 中央大學校 日本研究所 pp.49-63

_____(2020) 「日本植民地時代朝鮮における簡易学校制度に関する一考察」 『日本文化學報』 87 韓國日本文化學會 pp.241-262

崔瓊玉(2020) 「메이지의 상상, 번역어의 탄생과 한국 수용 - [science]가 [科學]으로 번역되기까지-」 『比較日本學』 48 漢陽大學校 日本國際比較研究所 pp.317-346

_____(2019) 「메이지의 상상, 번역어의 탄생과 한국 수용-[economy]가 [經濟]로 번역되기까지-」 『比較日本學』 45 漢陽大學校 日本國際比較研究所 pp.267-290

尹榮珉(2109) 「조선 총독부 간행『朝鮮語法及會話書』 연구」 『日本語教育研究』 48 韓國日語教育學會 pp.143-159

閔丙燦(2020) 「『全一道人』의 일본어에 관한 일고찰 - 〈欲遣繼妻〉에 대한 번역어를 중심으로-」 『比較日本學』 48 漢陽大學校 日本學國際比較研究所 pp.383-400

權景愛(2020) 「중세 예수회 선교사들에 의한 일본어 교육 -조선 사역원의 일본어교육과 비교하여 -」 『外国語教育研究』 34 韓國外国語大學校 外国語教育研究所 pp. 115-132

【 参考文献 】

- 康仁善(2017)「日本語史研究の現状と展望」『日本語学研究』51 韓国日本語学会 pp.57-65
- 朴孝庚(2019)「日本語の史的研究の現状と展望」日本語学研究 韓国日本語学会 pp.116-119
- 李康民(2020)「한국의 일본어 연구: 동향과 과제」『日本研究論叢』51 現代日本學會 pp.254-271
- 吳美寧(2018)「일본 古文孝經 훈독의 계통에 관한 고찰」『口訣研究』41 口訣学会 pp.67-87

〈요지〉

일본어사의 현황과 전망

본고는 2019년 1월부터 2020년 12월에 걸쳐 일본어사 연구의 동향에 대한 연구방법과 방향성 측면에서 고찰함을 목적으로 한다. 그 결과는 다음과 같다.

첫째, 문자, 표기, 어휘 분야는 점차 감소하는 추세이며 음운 분야의 논문은 점차 증가하는 것으로 나타났다. 특히, 음운분야연구의 경우 한자음에 대한 연구가 과거에 이어 지속적으로 진행되고 있으며 연구자료는 주로 중세에서 근세에 초점이 맞춰져 있다.

둘째, 어휘연구에서는 근대의 코퍼스를 이용한 연구가 활발히 이루어지고 있다는 점과 데이터베이스화에 의한 한자연구도 진행되고 있다. 어휘 연구는 근세에서 근대로 넘어가는 시기에 집중되어 있다.

셋째, 문법연구에서는 언어의 변화시기인 중세시대의 연구에 초점이 맞추어져 쇼모노를 자료로 한 연구가 다수 이루어지고 있다.

넷째, 개화기 일본에서 만들어진 한국어학습서, 〈첩해신어〉와 같은 왜학자료 연구도 과거에 이어 지속적으로 진행되고 있다.

앞으로 일본어사의 개별 연구의 심화는 물론 공동연구자가 유기적으로 결합된 새로운 연구가 이루어지는 시대가 되기를 바란다.

논문분야: 일본어사

키워드: 문자, 음운, 한자음, 문법

■ 이승영(李承英)

광운대학교 교수

sylee27@kw.ac.kr

■ 投稿日 :	2020년	12월	30일
■ 審査開始 :	2021년	1월	12일
■ 審査完了 :	2021년	2월	15일
■ 掲載確定 :	2021년	2월	16일